

平成27年10月1日

発行人 長野県民生委員児童委員
協議会連合会
会長 伊藤 篤志

編集人 編集委員会
委員長 熊井 文弘

〒380-0928 長野市若里7丁目1番7号
(長野県社会福祉協議会内)

特集

介護の現場を考える

Contents

◆特集 「介護の現場を考える」

- 専門家にインタビュー 庄村智子さん…………… 2
- 認知症の家族に聞く
飯山市「輝望(きぼう)の会」訪問…………… 3
- 介護の現場を訪ねる
NPO法人峠茶屋…………… 4・5

◆民児協訪問

- 喬木村民生児童委員協議会…………… 6
- 北相木村民生児童委員協議会…………… 7

◆特集 「介護の現場を考える」

- 介護者手記 牛越克巳さん…………… 8

介護の現場を考える

専門家にインタビュー

高齢化の進展や家族構造の変化により、介護の現場は大きな課題を抱えています。在宅における老老介護や、施設における介護職の不足もそのひとつです。今回の特集では、介護する側に焦点を当てて、その実情を知ること民生児童委員としてどのように対処しているのかを考えます。

日本は超高齢社会に突入し、2025年には人口の2割が75歳以上の時代が来ます。ますます必要となる介護分野、とりわけ介護福祉士育成について、長野社会福祉専門学校の副校長、庄村智子さんに聞きました。



庄村智子さん

学校法人石坂学園「長野社会福祉専門学校」副校長。担当教科：生活支援技術、障害の理解、医療的ケアほか。保健師学校卒。養護教員を経て40代で義親の介護を経験。保健師として障害者福祉センターで主に障害者の機能訓練事業等に従事。平成4年より同校勤務。芹田地区民生児童委員3期目。

尊厳を守り、介護させていただく姿勢

—まず介護福祉士の教育機関を教えてください。

庄村 県内では11校、長野市内には3校あります。ここ長野社会福祉専門学校は平成4年に設立。その当時は県内にはここしかありませんでした。2年制で約850名の卒業生を社会に送り出してきました。職員は常勤が6名でアットホームな学校です。学生の中にはいったん社会に出た転職者や主婦だった方もいます。

—介護の仕事に関心がある若者たちが多いのですか。

庄村 正直言って需要に対して少ないと感じています。子どもの数が減少していることも原因のひとつですが、「きつい・汚い」という昔からある介護職へのイメージが拭いきれないのも一因でしょう。学生本人より、ご家族に抵抗を感じる人も多いのが現

状だと感じています。

—昔はそうでしたが、今もですか。

庄村 介護保険法が平成12年に施行されて、利用者がサービスを選んでゆくことができるようになりました。ですので、介護現場は、その人の尊厳を守ることに重きを置いてきています。本校では「やってあげる」ではなく「やらせていただく」という気持ちで介護に携わるよう教育しています。その点では、県内の介護施設はとも変わらなと思います。しかし教育現場では希望者数が減少傾向にあります。介護の仕事の素晴らしさをもっとPRしていくべきだと思います。

—学生たちの現状を聞かせてください。

庄村 「人の役に立つ仕事がしたい」と考えている学生がほとんどです。もちろん最初は、コミュニケーションが苦手なタイプの人もいます。2年間の教育の中でその人の持っている力を伸ばせるように働きかけています。本校には実習施設が50力所以上あり、現場で働いている人たちに刺激を受けて、約8割は実習施設に就職しています。今では、実習施設側も学生の個性を伸ばすよう協力していただいています。

人材不足解消と環境整備を

—福祉施設の介護現場での課題はなんですか。

庄村 やはり人材不足ですね。一人の職員への負担が大きくなり、かゆいところに手が届かなくなることもあるでしょう。特に新人はマンツーマンで先輩について仕事をするといいことも必要です。また、

介護現場にはいろんなスタッフが混在します。昭和62年に介護福祉士という資格ができましたが、今のところ現場では資格がなくとも介護スタッフとして働くことができます。ここで教育と現場とのギャップがあり、学生が現場に出た時に悩む場合もあるのです。現場の人材の質の向上は課題だと思います。

—女性スタッフが多く、離職も課題ではないですか。

庄村 そうですね。でも最近はお産で辞めることがないよう、産休や託児所を整える施設も増えてきました。働きやすい環境づくりは介護の質をよくすることにつながると思います。

介護施設の現場への理解を

—最後に民生児童委員として介護をする人たちの課題をどう捉えていますか。

庄村 民生児童委員になって、改めて一人暮らしのお年寄りの多さに驚きました。また認知症の症状にしても、一人ひとり違つので、教科書通りにはいかないと実感しています。地域の人達との関わりの中で、良い人間関係、信頼関係を築き、特に介護問題については、地域包括支援センターにつなげてゆくことが、大切だと思います。介護現場では、介護スタッフは一人ひとりの思いを大事にして介護していること、特に介護福祉士は教育現場でそうした教育を受けて育ってきていることを、みなさんに知ってほしいと思います。

—ありがとうございました。

飯山市「輝望(きぼう)の会」訪問

認知症患者を家庭で介護する家族の現状はどうか。飯山市で毎月最終木曜日の午後に開催している、飯山認知症家族会「輝望(きぼう)の会」取材しました。

認知症の 家族に聞く

専門家が発起人でスタート

飯山市の地域包括支援センター主催の「家族介護者教室」で、「介護者同士が交流できる場が早急に欲しい」という家族の悲かな訴えを受けて、2012年3月に「輝望(きぼう)の会」が立ち上がりました。教室をサポートしていた、キャラバンメイ卜の研修を受けた保健師や介護士3人が発起人となっています。毎月介護者が気軽に集まり、お茶を飲みながら交流しています。設立以来約30回、のべ100人以上が参加してきました。

「定期開催することで、だんだん互いに本音が話せるようになった」と会長で保健師の中澤美和子さんは手応えを感じています。「必要に応じて、行政や、包括支援の職員もお誘いして情報を共有している」と、主催者が専門家だからこそ経験や人脈を生かした対応がなっています。

家族会の交流が家族を支える

8月の「輝望の会」には、在宅介護を7年間してきた、最近母親を見送られた介護家族のAさんとその夫が参加し地元病院の看護師や、介護施設所長を務め退職したCさんも交えて意見交換を行いました。Aさんは「認知症は任んでいる家族しかその状態がわからない」という落とし穴がありました。私の母のことは近所に公開して説明しましたが、正直理解してくれない方もいました。そんな中、この会に来て話せたこ

とは私の大きな助けになりました」と語りました。

Cさんは「介護する家族がこうした会に来られない理由は一つ、当事者から目を離せないこと、そして自身も外に出るのが億劫だということ」また、「認知症患者を介護する家庭にとって、近所の人の助けが必要。でも、その家族の関係を理解した上でサポートしていくことがポイントです」とサポートする側の配慮について話しました。

地域の居場所や、家族の関係づくり

Aさんの夫は「地域の祭りやイベントに参加しやすい態勢づくりや、公民館などで日頃集まれる場所があり、互いに情報共有することが大事」と発言しました。また介護する際の夫婦の関係にも触れ、「過去に自分の両親も妻に看てもらい妻に感謝している。今回は妻が母を介護することを、自分が全力で支える側に回った。毎日介護の様子を妻から聞いて、サポート機関との打ち合わせの時などは、いつも自分が同席するようにした」と、介護する家族の関係づくりの大切さを話してくれました。

中澤会長へのインタビューでは、「全国的にも認知症患者が増えている中で、健康調査をしながら早期発見をし、認知症予防に取り組む政策が取れないか。結核予防法などに習った、法整備も願う」と強調しました。また民間サイトとしては、こうした会の立ち上げが大切で、飯山市の事例のよ

うな包括支援センターをはじめ、ケアマネージャー、民生児童委員などの連携で家族会を支える仕組みづくりも大切だとわかりました。

民生委員も家族会の後押しを

今後の課題としては、地域の機関同士のパイプを使い、家族会への参加者を増やすことだといいます。介護している家族は当事者を施設に預けないと参加ができないという側面もあります。認知症は、家族自身が人に話したくないという傾向もあります。

家族会運営に関しては「今後はずせひ、当事者が運営を担って、私たち福祉経験者がサポートする体制になれば」と中澤さん。今後こうした家族会の立ち上げや運営、参加者誘引の後押しを民生委員が協力していくことも必要とされています。



向かって右手前が会長の中澤さん。左手が参加者の夫妻。



介護の現場を訪ねる

人生の峠でいっぷく、

「峠茶屋」が地域を支える

2005年に松本市に合併した旧四賀村は、かつては旧善光寺街道の宿場で、松本から峠を越えて長野へと向かう風光明媚な地域です。NPO法人峠茶屋に向かう途中、山あい美しい棚田を眺めることができました。「人生の最後の峠を越える前にいっぷくして欲しい」という思いを込めてこの名前をつけました」と、語ってくれたのは、専務理事江森けさ子さんです。現理事長と夫婦二人三脚で13年前、静岡から60歳で早期退職しUターンしてきました。江森さんは看護師として働く中で、利益優先ではなく、一人一人に向き合う施設運営ができないかと思いをめぐらせていたといいます。「自分が元気なうちに理想としていたことを実現したい！」と江森さんは一念発起し、60歳で退



本当に峠のお茶屋さんみたいな看板です。写真は専務理事の江森けさ子さん。

NPO法人 峠茶屋

松本市刈谷原町531-1

TEL 0263-64-1141

FAX 0263-64-1140

職金を手に出身地であるこの地に戻ってきました。「利益のためじゃない経営がしたい」と、NPO法人を設立し、小規模のデイサービスを平成15年9月に開所しました。

地域で看取る経験が突破口に

ところが、「最初の2カ月は利用者がなかった」と言います。ちょうどその頃、地域で医療関係のケアマネージャーを求める声があり、看護師はもちろんケアマネの資格を持っていた江森さんは、居宅介護支援事業所を開所しました。そして地域の介護家庭を訪問し相談を受けることになりました。看護師の資格がある故に大変なケースに対応。「在宅介護で今まで7人の方々を看取らせていただいた。在宅でゆっくり自然に旅立つ姿は本当に美しいのです。素晴らしい経験ができた本当に嬉しかった」と穏やかな笑顔で話してくれました。

認知症で疲れきった家族を支える

「でも認知症のお年寄りを看る家族がぐたぐた疲れ果てている。徘徊したり暴れるのを拘束したり薬を使ったり…。なぜ地域を支えてきたお年寄りがこんなことになってしまっのか」。お年寄りや家族の苦悩を垣間見たとき、「ならば、私たちが認知症のお年寄りのグループホームをやっちゃおう(笑)」とグループホーム「すみか」をオープンさせました。

9人の小規模型の施設で、徘徊や錯乱の症状がある難しい認知症のケースにも臆せず対応しています。「グループホームをやってみて、認知症のことがよくわかった。一日の中で、症状が出てくる時間にどう対応すればいいか、それがわかれば大丈夫。介護する側には観察する力と、その人に向き合うハートが大事」と江森さんは自信を持つ



◀窓越しの緑が縁側のような安心感を演出しています



▲爽やかな風が吹き抜ける平屋になっています



▲「グループホームすみか」は心安らかに過ごせる棲家です。



▶一人ひとりが作った力作！ひまわりがみんなを見守っています



▲テレビもカラオケもない、でもみんなの笑顔と歌声で溢れています



▲江森さんは毎日、利用者のみなさんと楽しくふれあいます

て説明します。錯乱して薬漬けになっていたある利用者のケースでは、「仕事に行ってくる」と言って施設を抜け出す利用者を、ゆっくり車で見守って、通りかかったふりをして連れ帰るといったことも繰り返しました。薬もできるだけ制限し、みんなとコミュニケーションもとれ、穏やかな生活ができるようになったといいます。



▲事務局スタッフとケアマネジャーの二人



◀長年の積み重ねで、利用者との関係もできています。

▼入口の地元作家の作品が全てを表しています。



▲峠茶屋は自然に囲まれ、光がいっぱい差し込む環境です。



▲のびのびと体操をするデイサービス利用者

「その人に向き合い大事にする」という揺るぎない介護の柱を中心に、最初は戸惑っていたスタッフも成長。江森さんの医療の知識にも支えられ、多くのお年寄りが、混乱の状態から平穏な状態へと改善し、静かな日々を送れる場となっているのです。

介護の総合的な支援態勢を実現

開所から10年以上経過したデイサービス峠茶屋は、昨年11月に、15名定員のデイサービスと、住宅型有料老人ホームを併設した複合型施設として、建物を建て替え新たな一歩を踏み出しました。施設内には居宅介護支援事業所、ヘルパーステーションも配置し、ナイトケアにも対応しています。ベテランの介護スタッフはもちろん、ケアマネジャーが常駐し、インターネットで情報発信できる若い男性スタッフも活躍しています。

「今問題になっているひとり暮らしのお年寄りの生活を支えたい」と、住宅型有料老人ホームの7部屋の個室には、介護が必要なひとり暮らしの利用者が入所しています。別名「下宿屋さん」と呼び、スタッフが食事を作ったり掃除をしたり、入浴介助もします。内部でデイサービスと通路がつながっていて、昼間は、一緒にレクリエーションをしたり、話をしたりして楽しむこともできます。別居している家族に要望があれば介助にも来ていただき、いつでも在宅で看取ることができる態勢も整えています。

すぐ前の建物に「訪問看護ステーション」もオープンさせました。たった13年で、60歳からスタートした夢が、今大きく膨らんでいます。「ここまでできたのは、よそ者の私たちを、支えてくれた住民のみなさんのおかげ。感謝しています」と江森さんは常に謙虚です。

認知症への理解を進めたい

最後に、「実は人形を相棒にして、認知症の啓発活動をしているの」と、笑顔で可愛い人形を3体取り出し見せてくれました。人形との掛け合いで、認知症について説明する講演を引き受けています。また松本市民タイムスでもコラム「老いを生きた応援歌」を連載。施設運営の傍ら、県内外で認知症を始め、一人一人に向き合う形の介護について、啓発活動に努めています。「ぜひ民生児童委員のみなさんに、認知症への理解を深めてほしい」と結びました。



▲訪問看護ステーションの建物は住宅の1階、秘密基地です



▶認知症啓発の人形と一緒に



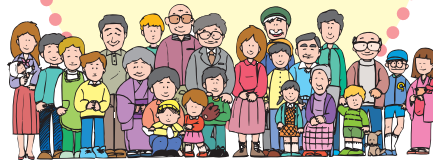
▲住宅型有料老人ホーム「にしきの丘」は別名下宿屋です

訪問



記者が地区民児協におじゃまし、会長や委員とコミュニケーションを図って、第三者の目でレポートしていく「訪問」コーナーです。

民児協 だより



喬木村民生児童委員協議会



▲「女性が元気です」と言う大原会長は前列右から5人目。

民生児童委員が「赤ちゃん訪問」 地域全体で、顔の見える雰囲気づくり

天竜川を挟んで飯田市の対岸、人口約6600人の喬木村は、丘陵や渓谷が入り組む複雑な地形が特徴です。「下段」と呼ばれる天竜川流域は標高400m。段丘状の傾斜地は「中段」、そして「上段」は標高1800mにまで及んでいます。約8割が森林原野という喬木村で、民生児童委員の活動する単位は16地区。高齢化率が65%に達する地区もあれば、21%程度の地区まで、場所によって大きな違いがあります。

喬木村民生児童委員協議会の大原成章会長は、元役場職員です。

民生児童委員協議会の事務局を務めたこともあり「以前は『会長』とは言わず『総務』だった」という時代を知っています。ですから会長と呼ばれるようになった今も「みんなが同じ立場。基本は各地区でそれぞれが主体的に活動する」という原則を意識しつつ、その上で問題を共有する方針で協議会を運営しています。

今年4月から「赤ちゃん訪問」を始めました。「村内で誕生する赤ちゃんは年間50人くらいしかない。ひとりひとりの子を大切にしていきたい」と、保健師による新生児の2ヶ月時訪問の日に合わせ、ボランティアさんたちが手作りしたよだれかけと、市瀬直史村長のメッセージを持参し、主任児童委員と地元の民生委員が家庭を訪問します。初回の訪問は、地元のテレビニュースでも取り上げられるなど、話題になりました。「地域、村全体から見守ってもらえるので安心」という、母親の声が寄せられたそうです。

「学校の先生方と、年に1度の懇談会は行っているが、それだけでは不十分。若いお母さんたちと顔見知りになっておくことで、困った時の相談をしやすい雰囲気になりたい」と、大原さん。住宅団地を整備するなど、若年世代の定住促進に力を入れる村の方針にも沿った活動です。大原さんの期待も大きく、「移住促進や若者定住策は、多くの自治体でやっていますが、南信は人情に厚くていいですよ」。今では各地で盛んになっている「いちご狩り」も喬木村生まれとのことで、農業は村の基幹産業となっています。

大原さんは、2期で辞める委員が多いのを懸念しています。「せめて3期は務められる環境に」と考え、負担が大きすぎないよう配慮しながらも「現場を見てつなぎやすくするため」の施設訪問を開始。貴重な資料が配布される定例会の後に「勉強会ができれば」など、少しずつ前進のアイデアを温めています。



▲手作りのよだれかけを届ける「赤ちゃん訪問」。

北相木村民生児童委員協議会



▲山村留学の子どもたちの多い小学校との交流を積極的に。

山村留学で子どもたちが共に育つ、 委員や教員、村全体で見守り協力

南佐久郡北相木村は長野県の東端にあり、峠を越えた隣は群馬県上野村です。八ヶ岳高原の麓で、総面積の9割以上が山林。縄文時代の遺跡が発見され、古くから人が住んでいたことをうかがわせる自然豊かな環境です。ところが現在は、人口800人を切る過疎の村に。ここで、6人の民生児童委員が活動しています。

渡辺逸男会長が開口一番に触れたのは、「山村留学」についてです。主に小学3〜6年生を原則1年間、村に受け入れる制度で、子どもたちは指導スタッフが常駐する「山

村留学センター」で暮らし、時には農家宿泊を体験しながら、村内唯一の北相木小学校に通います。全校生徒53人のうち21人が山村留學生ですから、留學生なしには小学校の存続さえ難しいというのが現状です。

留學生は村の行事などにも参加し、自然の中で想像力や行動力を伸ばしていきます。彼らを受け入れる村の子どもにとっても大きな刺激となるなど、村にとっては活性化につながる事業です。

民生児童委員も、小さな村の学校行事を盛り上げるため、音楽会や運動会に参加し、教員と交流をもち、子どもたちを見守る態勢をとっています。渡辺会長は「家族と離れて滞在し、毎年のように入れ替わる留學生への対処は、難しい面もある」と語ります。

また、山村留学センターと移住者のための住宅団地は、一つの地区に集中していることから、問題を共有しにくい面もあり、民生児童委員は課題の一つとして積極的に取り組んでいるとのこと。

山村留学制度を北相木村の規模で行っている自治体は県



▲定例会も和気あいあいの雰囲気で。左から2人目が渡辺会長。

内にも例がなく、問題を提起する場のないのも渡辺会長の悩みです。制度発足からもうすぐ30年。これまでの実績を評価しながらも「将来の子ども像を描きながら、今度どうしていくかを検討すべき時期」と、渡辺会長は訴えています。

子どもたちの行事を手伝い、敬老会では中心的役割を果たし、高齢者施設を訪問するなど、イベントだけでも忙しいのが北相木村の民生児童委員。ひとり暮らしの高齢者の中には、村外に出た家族との間を行き来する人も少なくなく、在宅と不在の確認を取りにくいとの課題も。そんな中、こじんまりした村ならではのチームワークで活動に励んでいます。



表紙写真紹介

千曲市上山田八坂地区
智識寺様の十一面観音菩薩堂

撮影

上田市豊殿地区民生委員児童委員協議会

地区会長
矢沢地区担当 樋村 守彦 さん

千曲市上山田八坂地区の「智識寺様の十一面観音菩薩堂」を秋の最高の紅葉時におと連れたとき撮った写真です。寺名も知らなく、たまたま、筑北村に行く途中に通ったところ、お寺の紅葉が綺麗に見えたので、車を止めて散策するが十一面観音菩薩堂の苔むした屋根と楓の紅葉と参道に落ちた落ち葉のコントラストが素晴らしく思わず撮影した1枚です。

profile 「民生児童委員1期目です。写真が好きで、風景、花、昆虫、露、霜模様等を被写体にして撮って、自己満足にふけています。また仲間と、撮影旅行にたまに出かけて親睦を図っています。このところ写真を撮る機会が減ってしまいましたが少しずつ撮っています。



介護者
手記

牛越 克巳さん

昭和15年生まれの75才。信州大学教育学部・美術科卒業後、グラフィックデザイナーとして現在に至る。松川村社会教育委員、人権教育推進委員、食育推進協議会委員、青少年育成村民会議委員、村づくり推進委員等。大北シニア大学・絵手紙講座講師。まつかわ落語会・風まんだらの一員として北は栄村、南は王滝村まで出前に忙しい。安曇野文芸の同人でエッセイを書く。介護歴20年。

介護を20年

母、この12月満96才。アルツハイマー型認知症歴20年。体は至って丈夫で、まだ自分の足で歩ける。私の家から歩いて1分の自宅で独居。寡婦(かひ)になって20年。この方が私と妻で介護している私の実母。子供は3人で妹2人だが他家へ嫁いでいる。

庭掃除、雪かきとかろろ(ろ)うじて用便、自分で食べる、これ以外はほとんど何もできない。朝5時45分、アラームで私起床。支度して朝食のパン、毎朝飲む薬、おやつ(おやつ)の菓子、鉛玉(おんたま)の入った袋を下げて母宅へ向かう。廊下の戸を開けて入る。早寝の母は大体起きて、モソモソしている。まず薬を飲ませるのだが時々飲み方がわからなくなる。次に入歯(いば)を入れさせ、鉛玉を1つ口に入れてやる。茶をそそぎ仏壇に線香を立て鐘を叩き合掌(あがむ)をする。20年前に亡くなった自分の亭主(ていしゅ)の仏壇だが、その存在自体が過去。ゴミを片付け、トイレに行つて汚れた尿取りパッドを片付け、新しいパッドに交換して帰る。私の朝の仕事だ。冬だとまだ真(ま)つ暗(くら)だ。すでに何年前からか私は息子ではなく「おじさん」で妻は「おばさん」である。デイサービスは週4日。迎えの車が来る15分前に支度に行く。これも私の仕事。ど(ど)ついつい訳(わけ)だか妻だと

時々いやがって支度をかえないので私の役目になった。少し遅れてきた妻が支度の続きや顔を拭いたり、用便をさせたりして送り出す。

家にいるときは妻が午前のお茶、お昼ご飯、午後のお茶を運ぶ。夕方は2人で大体5時に行き、薬を飲ませ夕飯を食べさせ、ベッドへ寝かせ、熟睡を確認して帰る。母には悪いと思うが大体の時間に寝てもらわないと都合が悪いので睡眠導入剤を処方していただき毎晩飲む。日によって効き具合が違い、効き方が速いとベッドまで運ぶのに2人がかりで大変。

毎年大体決まった時期に不機嫌になる。3月から4月の花見時と寒くなりかける初冬。それと低気圧の日。デイサービスに行くのを渋(しぶ)ったり、支度を嫌(きら)がったりして困らせる。

20年の間、少しずつ進行して、途中ひどい被害妄想が数年続き、この時はわたしも神経的に大分苦しみ、今も少なからずあるが大分楽になり介護にも余裕が出てきた。

今は、とにかく母がして欲しいことは何か、一番喜ぶ言葉はなにかをまず考えるようにして介護をしている。私も75才の後期高齢者の仲間入りをして、老老介護の心配も出てきたが、病院のベッドではなく、できたら自宅のベッドで最後を迎えさせてやりたいと思っている。



編集委員

リレー日記

岩手県の中学生在が電車で飛び込み、自らの命をたった事が話題になっています。

報道では「いじめ自殺」といわれ、担任はじめ学校での対応が死に至ったのではないかと批判されています。父親が「あの子は死んで楽になった。」と言っているそうです。が、たった十三歳の未来のある子が死んで楽になるなんて事はあってはならない事です。父親は、本当に我が子の異変に気付いていたのでしょうか。学校の責任を問う前に我が子(こ)のことは、まず家庭で見守る事がい(い)ちばん大切ではないでしょうか。中学生という思春期のむずかしい年頃ですが、子ども達の行動にはすべて意味があるそうです。辛い時にはつらいと、嬉しい時にはうれい(うれ)いと表現できる家庭環境や学校生活であつてほしいと思います。

学校では生活ノートが共有できる環境を、家庭では顔を見て目を見て会話ができる関係を築いてほしいものです。

古川友枝